

チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開莊2号
Tel·Fax 093(681)1780

口座番号 福岡7-65328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

平成16年3月1日
No.
24号

Однажды в редакцию нашего издательства пришло неожиданно длинное письмо. Со дня чернобыльской катастрофы минуло довольно много времени, люди со все большим участием задумывались над тем, что произошло и что может произойти. По Японии и другим странам прокатилась волна демонстраций в ответ на угрозу, которую таит в себе становящаяся ядерная тошниба — и иные действующие, и строящееся новое поколение их.

Автором письма была Тазка Каниша, мать двоих детей, из префектуры Фукуока. Это простая женщина, она не слишком сведуща в текущих социальных проблемах, она даже не знала, что атомную электростанцию у нас в стране обозначают «геницией».

Бы как-то удалось побывать на лекции Такаси Хирюса, он, журналист по профессии, рассказывал своим слушателям об опасностях, связанных с деятельностью АЭС. То, о чем она тогда узнала, произвело на нее громадное впечатление. Поддавшись душевному порыву, она стала ходить на другие лекции, посещать собрания, посвященные развитию ядерной энергетики, читать документы и книги из эту тему. О том, что ей стало известно, она написала своим близким друзьям.

Вначале письмо выглядело очень личным, доверительным, нам же хотелось, чтобы его прочно возложено было на членов людей. Под напоминем трагедии в Чернобыльской стране решили спешить до минимума или вообще свои атомные станции. Однако Япония все расставляется со словами АЭС, развиваст течения ядерного тошниба.

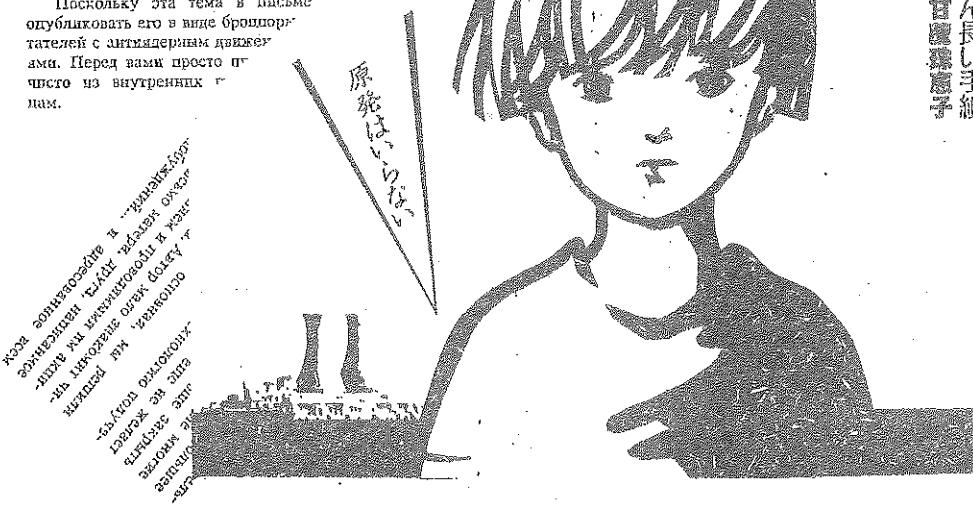
Поскольку эта тема в письме опубликовать его в виде брошюры, тателей с антиядерным движением. Перед зами просто чисто из внутренних нам.

タエカ カニشا

пока не поздно

● Монолог
веселой
серда

まだ
まだあります
私の書いたじがいすんぢ手稿
手稿



深江さん

あなたに定期通信を書き、甘蔗さんの本を送りましたことに満足しています。

甘蔗さんの本のロシア語版発行を喜んでいただけたと思います。著者の住所を知りませんので、あなたから甘蔗さんへお送り下さい。わたくしからのお祝いも伝えて下さい。彼女にはぜひこちらに来ていただきたいものです。

2月に私共への代表団を送られなかつたことは残念でした。極寒の地を訪れる志願者がいなかつたことも分かります。私が悲しかつたことは、新たな訪問が中止になつたことよりあなたの便りが長い間ないことです。

ここでサナトリウム・九州での子どもの健康回復の事業について簡単なご報告をします。

1、1992年の開所以来、のべ1110人が健康回復のために入所しました。基本的にはゴメリ州とプレスト州のチェルノブイリ汚染地区の子どもたちです。

93年8月から94年1月まではサナトリウムの運営費用は同盟でまかないました。といいますのも多くの労働組合がインフレの関係で資金が破綻し、子どもたちを派遣する費用がなかつたためです。

94年2月からはよりよい条件で契約を結び始めています。労働組合は費用の50%までを状況の変化はあっても負担するというものです。

1992年12月より1994年2月までの期間、1110人の健康回復に要した費用は10万3852ペラルーシ・ルーブルです。米ドルでは2万8705ドルです。このうち2万7059ドルは支援基金からの出資です。それは同盟の外貨預金からのものです。

2、サナトリウム・九州に以下の診断および治療機器を購入しました。

価格はドルで表示しています。

⑥ 「エクスペルト」全器官の早期診断器	642.2	ドル
⑦ 「ミルタ」免疫不全症分析器	118.66	ドル
⑧ 「ヘルペル」磁気赤外線レーザー器具	140.97	ドル
⑨ 「リアデラク法による短波周波数システム」	5000	ドル
⑩ 冷蔵庫「ミンスク16」	832	ドル
⑪ 録音機	73	ドル
● 機器の合計金額	6808	ドル

3、子どもアンサンブル「パレスカヤ・ゾーラチカ」の日本派遣の往復費用（モズイリーモスクワ間も含む） 9300ドル

以下、いくつかの点について説明します。

- 一年間の入所料が比較的安い点については2つの理由があります。
- 1、1992年から1993年の上半期は外貨の交換レートに比べて商品が安価でした。現在は価格は国際水準になっています。
 - 2、冬休みの子どもの入所期間が短くなっています。

◆ 現在、1クール24日間の費用は80万ルーブル、7300ドルです。

サナトリウムの全支出のうち食費の占める割合は47%です。1年前は36%でした。医療スタッフの賃金の割合は3・6%です。

私たちの計画では、1回の入所者は120人から150人です。夏季には180人を考えています。2月10日現在、100人の母子が入所しています。

良い状況の下で、もちろんみなさんの援助があってのことですが、1994年には最低1500人の入所を考えています。しかし、みなさんの援助なしには長くは持ちこたえられません。私たちのところの問題はビタミン剤、健康増強剤、子どもや大人の貧血の改善のための鉄分含有剤が不足していることです。最近私たちは90万ルーブルで薬草や薬草から作られた錠剤を購入しました。

マイクロバスの購入も実現していません。残念なことですが、ドイツとの関係がありません。

生活はうまくいっています。すべての問題や困難を克服しながら、九州からの暖かい援助を得て、元気に積極的に取り組んでいます。

コースチャ・ガリンスキの慢性放射線病についての1月23日づけのFAXを受け取られたことと思います。彼の病気と運命に光明がさしますことを願うのですが。

手紙の最後にお伝えしたいことがあります。ペラルーシ・テレビがサナトリウム・九州に関する番組の準備を始めました。テレビ局との話し合いで、あなたがたのミンスク来訪を取材しようと言うことになりました。テレビ局と文化省との基本的な取り決めではサナトリウム・九州の募金集めのためのテレラジオマラソン（モズィリから）をおこないます。しかし、これに対してはよく準備をしなければいけませんので実行は来年になります。

国際子ども民謡フェスティバルは6月15日に始まります。これはモズィリではなくブレスト州のピンスクとミンスクで開催されます。ルデンコさんはどう書いたのでしょうか。来年のテレラジオマラソンと一緒にやりましょう。

みなさんのところの子どもアンサンブルがもしもこの国際フェスティバルへの参加希望がありましたら、すぐ連絡下さい。すぐFAXで招待状を送ります。

あなたの健康とすばらしい事業に成功をお祈りします。

敬具

ワシリ・ヤコベンコ
ミンスク 1994年2月10日

チェルノブイリ通信No.24号を お届けします。

今回は第四次調査団派遣のお知らせが中心となります。当初の予定では昨年末には派遣することになっていたのですが、極寒の地を訪ずれるメンバーが見つからないこともあります。暖かくなつてからの派遣となりました。

この間、ミンスクからは3通の手紙が届きました。その内の2通は、前号の通信でもお知らせしていましたが、モズィリ市で開かれる「国際子どもフェスティバル」への案内が中心でした。どうせ派遣するならということで、この日程を考えていたのですが、2週間ほど前に届いた手紙（「まだまにあうのなら」のロシア語版がようやく出来上がり、その本と一緒に送られてきた）では、モズィリ市ではなくブレスト州ピンスク市とミンスク市で開かれることになったこと、日程も6月15日から始まるようになりました。そこで、第四次調査団はこの日程で派遣したいと思います。

サナトリウム・九州は順調に運営されています。これまでに、1110人の子どもたちが入所しました。

1月の初めにきたFAXでは、サナトリウムの運営について、政府との間で調整がうまくいっていない（たぶん援助が得られなかったのかも）、労働組合も厳しい状況

にあるという、非常に暗い内容の手紙が届きました。となると全面的に私たちの支援だけが頼りということになり、これもまた厳しい局面を迎えるかもしれないと思っていたのですが、どうにか難関を乗り切ったようです。

これまでまちまちであった費用の負担について、「派遣する地区的労働組合が、費用の50%までを状況の変化は合っても負担する」ということで契約を結ぶことができたそうです。私たちにとっても非常に喜ばしいニュースと言えます。

また、この一年間のサナトリウム・九州の状況も報告されています。（詳しくは手紙をお読みください。）それによると、一昨年の12月開所以来、これまでに1110人の子どもたちが、健康回復のために入所しています。1クール24日間で、一回の入所者120人から150人のサイクルです。今年度は1500人の入所を計画しています。九州からの支援なしには続けることはできない、という状況ですが、まずはサナトリウムが順調に維持、運営され安心です。

第四次調査団を派遣します。
6月12日(日)～20日(月)

第四次調査団を6月12日(日)から一

週間の日程で派遣します。

今回は、医療交流ということで、医者を一人調査団のメンバーとして同行してもらうことを計画中です。また、ペラルーシからも医療研修ということで2人ほど九州に招待したいと思います。日本に来るための条件は、英語が話せることですが、サナトリウム・九州の主任医師とモズィリ市から一人を考えています。

また、日本での研修先ですが、甲状腺の治療では良く知られている別府の野口病院に協力をお願いしています。期間は3週間程度です。

ということで派遣メンバーを募集します。今回は2人～3人のメンバーとなります。構成としては調査団メンバーが2～3人、同行医師1人、通訳1人（モスクワにて）の総勢4～5人の調査団ということになります。調査団としてペラルーシを訪問したい人は、4月中旬くらいまでに事務局まで連絡をください。

長崎県の長与北小学校の子どもたちから、サナトリウム・九州の子どもたちへ、募金と寄せ書きが送られました

長崎県西彼杵郡にある長与北小学校では毎年年末に、学校全体で募金活動を行ない、ユニセフなどに寄付を行なってきたそうです。その募金を今年は切尔ノブイリの子どもたちへということになりました。というのも、長与北小学校の一人の生徒が、昨年の9月に長崎で行なわれた「パレスカヤ・ゾーラチカ」の公演を見に行き、切尔ノブイリ原発事故で苦しんでいるペラルーシの子どもたちのことを知ったことがきっ

かけとなりました。

前略

私達の長与北小学校では、サナトリウム・九州のことをコンサートを通して知った一人の子が、学校全体の問題として提案し、募金活動を行なうことになりました。

その際、子どもたちから、お金だけより手紙もそえようという意見が出て同封した寄せ書きや手紙を書くことになりました。日本語で書いてあるので言葉は通じないかも知れませんが、気持は伝わると思います。

是非、「切尔ノブイリ支援運動・九州」の方からサナトリウムにいる子どもたちに渡してほしいと思います。

募金したお金については、郵便振込みました。

長崎県西彼杵郡長与町立

長与北小学校

児童会 代表 植木 良隆

サナトリウム
九 州
の
みなさんへ

長与北小学校

チェルノブイリ救援のための 絵はがきを取り扱って下さい

昨年、チェルノブイリ救援の思いを込めて、愛媛県内7ヵ所（宇和島、八幡浜、新居浜、西条、今治、重信、松山）の仲間が、療養中の子供たちに使ってもらおうとベビーキルトを制作し、9月には九州にこられたチェルノブイリの子供たちに直接手渡すことが出来ました。各地のキルトに制作に関わった方々から『是非、残したい』との声が高まり、絵はがきにして残すことができました。この絵はがきの収益はチェルノブイリ救援のために使われます。

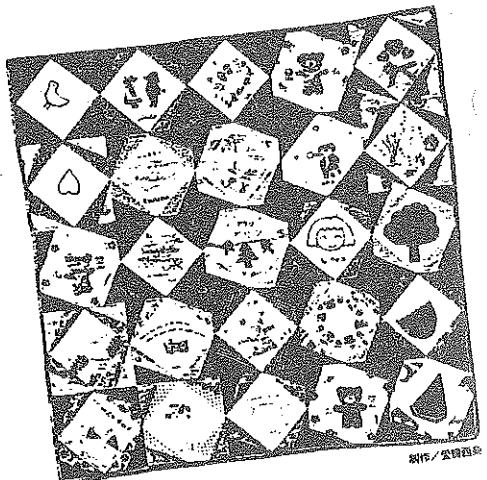
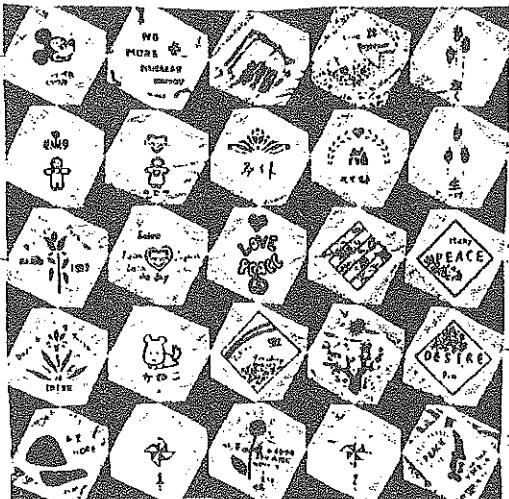
あなたのグループでもぜひ取り扱っていただけないでしょうか。ご検討ください。（価格は、6枚組で400円、50組以上は320円です。）
どうぞよろしくお願ひいたします。

（チェルノブイリ救援・えひめ）

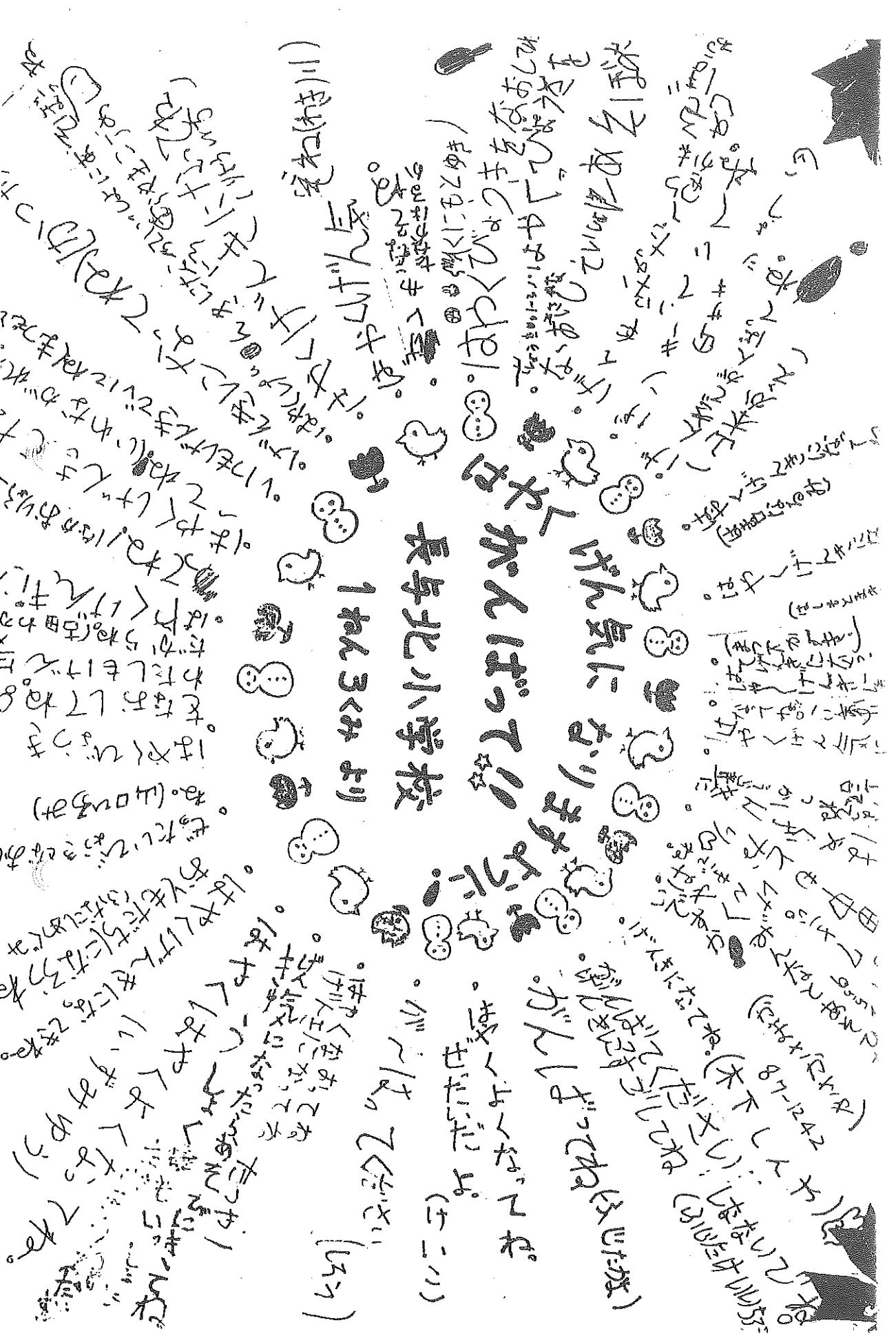
ということで、愛媛から案内が届きました。「救援・えひめ」からは毎年、救援金が「支援運動・九州」宛送られてきています。また、昨年9月には、最終日の宗像での公演の際、「サナトリウム・九州」に飾ってほしいと6枚のキルトと医薬品をもって駆け付けてくれました。今回、絵はがきになったのは、その時のキルトです。

しかも、何と収益は全て救援金として九州の方に送られることになっているそうです。

なかなかステキな絵はがきです。

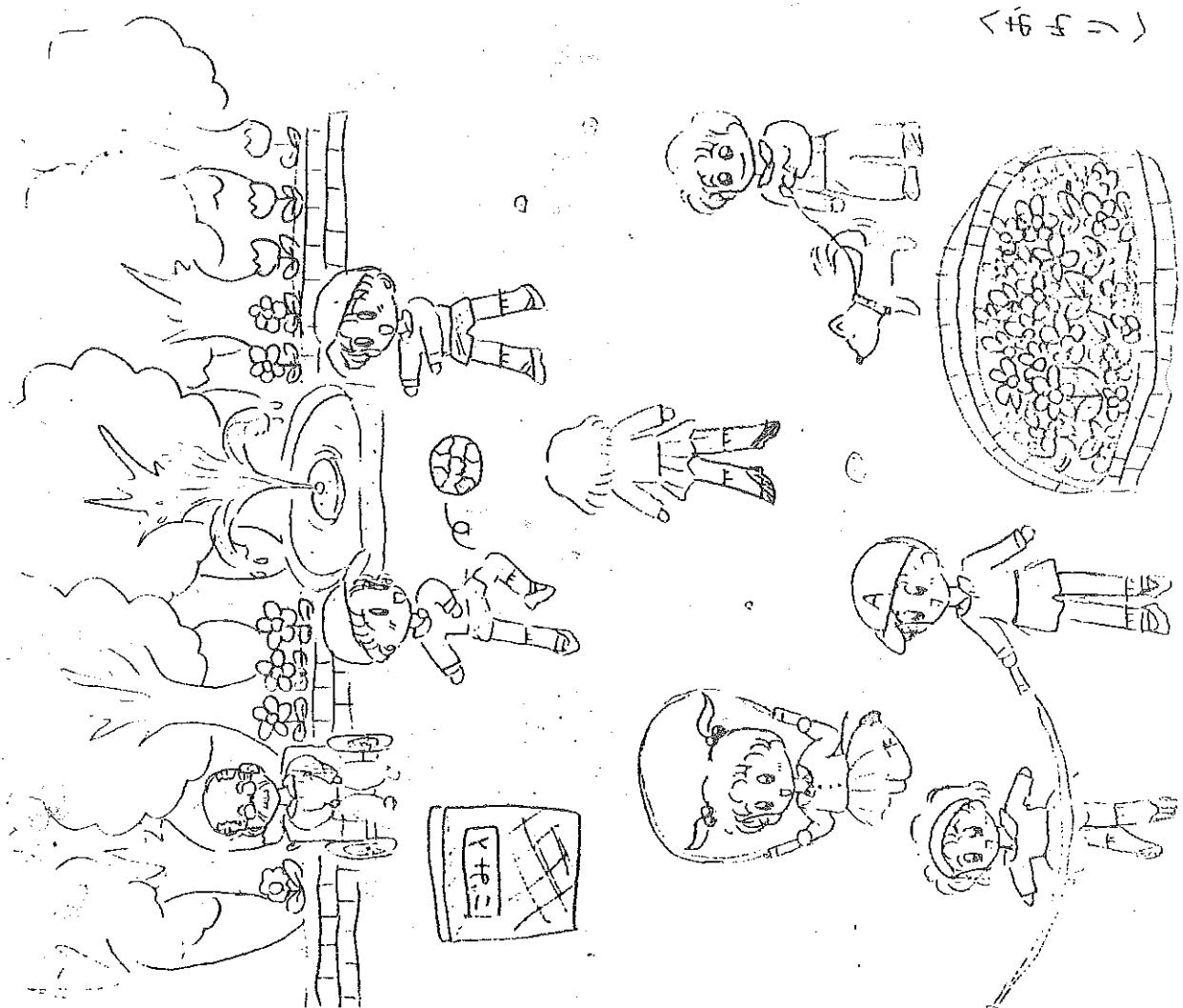


ノーモア・チェルノブイリの思いをこめて愛媛県内7か所のグループが作成したベビーキルトです。このキルトは、'93年9月ペラルーシ共和国で被曝療養中の子どもたちに贈られました。被曝者の一日も早い回復を願い、原子力発電所の事故が再び起こらないことを祈りつつ、絵ハガキにしました。この売上げはチェルノブイリ救援の為に使われます。



下圖為人體之三維圖

此山是用川里



最善のものすべて—子どもたちに?
“Nabat” No. 19 より

Tatyana Nikolaevna Khromenkovnaさんは、地方小児科医である。彼女の特別な関心事は、切尔ノブイリの惨事によってもたらされた子ども達への援助である。彼女は、私たちの話を率直な自白で始めた。

『……私は、しばしば村へ行かなければなりません。少し前ですが、私はKatashinという村にいました。歓迎会にいた母親たちのひとりが、彼女の子どもに栄養のある物を見つけてやるのは大変困難だと、不平を言ったのですが、そのことについては、何の不思議もありません。私たちのいる町と村は、境界一異なった供給によって分けられているように思えるのです。』

私は、科学者や医者は、村の子どもたちの健康をどう思っているのだろうかと思った。これに対し、Tatyana Nikolaevnaさんは言つた。

『……多くの病気は放射能の結果であり、それは骨の折れる調査を必要とすると、彼らは言います。いくつかの調査学会が、その問題に対処しています。多くの子どもたちは、これらの学会で、治療課題を受けています。ですが、彼らの大部分が特別な状態を必要としています。事態は、大変悪いのです。たとえば、今にいたるまで、私たには、神経病理学者、内分泌学者、眼科専門医、咽喉学者がひとりもいないのです。』

内科医という職業の信望の話がはじまつた時、Tatyana Nikolaevnaさんの攻撃は減らうとはしなかった。

『……文明国においては、内科医は収入という観点から見ると、実業家について2番目に位置します。ここでは、公共の健康管理のために、わずかな金額しか予算が組まれません。それは、まるで私たちの職業が、あまり重要でないかのようになります。ですが、私たちはみんな、職業的義務の感覚を持って、ここで働いています。』

私たちは、話の中で、罹病率についても軽く言及した。1989年以来、甲状腺患者が増加している。科学者もまた、血液系統の病気の増加を予測している。けいれん性の候群の増加もあるだろう。

もうひとつの驚くべき事実：Novozyibkovという町と、その地方では、子どもたちの5・3%が病気で、てんかんを持っている。ところが、この率はロシアでは、2・3%である。これらの事実を照らしあわせてみると、“子どもたちに最善のものすべてを”というスローガンは、苦い感情と私たちの若い世代への同情だけをかきたてる。

M.Volikov, the town of Novozyibkov

Наступают
РОКОВЫЕ ДНИ

ОБРАЩЕНИЕ
городского депутата
Анатолия Болкоза
к членам
Верховного Совета,
его Председателю С.С.Шушкевичу,
к Совету Министров
Республики Беларусь,
его Председателю В.Ф.Кебину

第三次調査団報告

■ ブッティストのお祈り

今回の調査団にはどういうわけか三人の佛教徒がいます。その内の二人、河上さんと宝蔵さんが、ここでお祈りをしたいといい出した。『ヤコベンコさん、彼らはブッティストなんですが、お祈りをする適当な場所はありませんか。』と言うと、『それならいいところがありますよ。』と歩きだした。玄関の軒先に額縁が置いてある。『何と書いてあるんですか。』『神を探しなさい、というキリスト教の一節です。避難する前に、ここでみんなでお祈りを捧げたのでしょうか。ここがいいですよ。』と。ペラルーシの人たちが興味深げに見守るなか、河上さんが線香を吹き始めました。宝蔵さんは太鼓です。予想以上の汚染の高さに、最初は十五分は時間が欲しいといっていた二人ですが、皆のことをきずかってか早めに終わってくれました。

ブッティストのお祈りも終わり、今度はペラルーシ式の「お清め」です。車のトランクから、『あれ、ハイキングだったかな。』と勘違いするような、食事の準備が始まりました。『さあ、私たちはウォッカを飲んで身体を清めましょう。』ということで、またもや酒席が設けられたわけです。『うん、酒でも飲まないとやりきれないかな。みんなの顔もそういっていた。』車の回りに輪になって清めのウォッカを飲み乾す。次々とウォッカの蓋が開けられた。やっか

いなことにペラルーシの酒瓶にはコルクの蓋はついていません。蓋を開けたが最後、なくなるまで飲み乾さなければなりません。『身を清める』という大義名分はあったものの、少々飲みすぎてしまい、この後の記憶が定かでないのが残念です。

この村からお土産をもって帰りました。木の実です。アプリコット（すもも）とクリゾーニック。どちらも一キロぐらいづつ袋にいれ、日本までもって帰ることにしました。（ミンスクに帰る途中の林のなかで、キノコのお土産も集めました。）何の為にかつて？。もちろん、放射能値を計るためにです。

■ パプチン研究所

ドロニキ村を後にして、三〇キロ圏ぎりぎりのパプチン村へと向います。廃墟となった村がそのまま「国立放射能エコロジー研究所」に姿を変えました。この研究所では、汚染地区の放射能の実態とその変化についての研究や土地のリハビリについての研究をしているとのことです。小麦を植えたり、ハチミツを飼ったり、暖かい南の作物であるギリシャピーナッツやぶどうも植えています。どんな作物が放射能に強いのか、弱いのか。

またゾーン内の様々な所の土を取ってきて放射能を調べています。私たちが訪れたとき、一〇キロ圏にある運河の泥土を計っ

ているところでした。コンピューターの画面を見ながら『おー、これはすごい』と興奮したのは憶えているのですが、それがなぜなのか全く記憶にないのが残念です。そうです。ウォッカのせいです。頼みのノートを見ても、書いた本人が読めない、というか意味が分からぬといふ有様です。こういう調子で私たちはゾーンを後にしモズイリ市に帰りますが、その後全く冴えません。という訳で、今日の報告は終わりとします。

七月廿四(土)

午前中、エレナさんが勤務している地区病院を少し見学させてもらい、隣の町カリソカビッチ市へ向います。そう、「サナトリウム九州」の記念すべき第一期生の出身地へ。カリソカビッチ市は人口四万三千人の農業の町です。サナトリウムへ娘と一緒にやってきたタチアナ先生が私たちを歓迎してくれました。今日もまたウォッカ責めとなりそうな、そんな予感が……。

タチアナ先生宅には伯母さんと妹さんが応援に駆けつけ、フルコースの家庭料理でもてなしてくれた。次々とでてくるご馳走の山にただただ驚くばかり。『ベラルーシでは出された料理は全部食べるのが礼儀なんですよ』と釘を刺される。『こんなに美味しい料理は初めてです。でも日本人の胃は小さいので、こんなに沢山は食べれませんよ。』と言い訳ばかり。するとやっぱりウォッカ責めがやってきた。『ウォッカを三杯飲み乾すと幸せがやってくるのよ。私のために三杯飲み乾して下さいね。』とタチアナさん。しかも、特大のグラスときています。またしてもあれこれと方便を考え

ます。

『タチアナさん。あなたが幸せになつてもらいたいとだれもが思っています。しかし、見ての通り、私は病弱です。しかも旅の疲れのせいか、胃も弱ってきたようです。とてもこんな大きなグラスで三杯もは飲めませんよ。』というと、『あなたが病弱なら、私は病人よ。それにウォッカを飲むと元気になれるわよ。』という調子で、結局三杯、四杯と飲まされてしまった。

タチアナさんの娘は甲状腺肥大でサナトリウムに行つたが良くならず、今モルダビアの保養所で療養生活を送っているという。娘のいない淋しさが、私たちへのより過激な接遇となつたようです。

【パレスカヤ・ゾーラチカ】

タチアナ先生の家を後にした私たちはようやくアンサンブルの子供たちと会うことが出来ました。そうです。九月に九州にやってきた「パレスカヤ・ゾーラチカ」(草原の星)の子供たちの熱烈な歓迎を受けたのです。モズイリ市に一つしかないという文化会館で、可憐な踊りどうたを披露してくれました。彼女たちに会うまでは、来日グループがドゥダルカ(笛吹き)から、パレスカヤ・ゾーラチカに変わったりして、いろいろと複雑な気持ちでしたが、彼女等の愛らしい踊りや歌、笑顔を見ていると目の前のモヤモヤはすっきりと晴れわたっていました。

後は仕事をするだけです。写真撮影、簡単な打ち合せ、プログラムの確認(日本公演用に手直しし、後日FAX連絡)などを行い、子供たちとの交流のひとときです。言葉が通じなくても万国共通の遊びはやは

り折り鶴です。河野さんが持ってきた折紙を全員に手渡して、指導するのは宝蔵さん。『ハイ、みんなこっちを向いて！。まず、紙を斜めに半分にあります。』と、どういうわけか日本語で指示をしますが、雰囲気で分かるようです。出来上がった折り鶴を見てみんな大喜びでした。

『みんな、海を見たことある？。九州にはたくさん海があるからたのしいよ。それに、ペラルーシの夏は涼しいけど、日本の夏はとっても暑いよ。』『何度くらいあるの？。』『そうやね。九月に入ってるけど三〇度ぐらいはあるかな。』

一斉に『ワーッ！』という歓声が響きわたりました。スイミング、スイミングはこの時からの夢だったのでしょうか。

『ねー、なにか日本の歌を教えて。』ということになった。『そうね、公演の最後に歌ってもらおうか。』ということになったのだが、「いざ」となると、中々歌がでてこない。一番はなんとか口に出てくるのだが、二番、三番となるとほとんどがうら憶えで、定かでない。ついには子供たちから、『日本人なのにどうして日本の歌を知らないのか』と言われてしまい、あやうく面目を潰すところでした。『赤とんぼがいいよ』と河野さん。『あー、いいね。ちょうど季節も赤とんぼの頃だし。』ということで、どうにか歌も決まり歌唱指導です。といつてもリズムだけで、歌詞はテープに吹き込んで練習してもらうことにしました。『二番まででいいんじゃない』という意見もありましたが、取りあえず四番まで吹き込み、歌詞をローマ字で書き、渡しました。

公演では最後までしっかりと披露してくれました。さすがです。

【モズィリ市は今……。】

夕方からはモズィリ市でのお別れパーティです。またしても、という感じですがこれも仕事のうちと、ガマンのウォッカです。パーティの前に、モズィリ市の医療機関の代表者との会談がセットしてありました。

子供病院院長のウィチュスラブさん、地区病院院長のバラノフスキーさん、保健局長のレオノフさんの三人との会談です。三人の話をまとめて報告します。

『モズィリ市は人口は一〇万五千人の町です。その内子供は二万四千人です。チエルノブイリの事故後出生率などが減ったため、人口はどんどん減っている。事故前の出生率は一〇〇〇人につき一七・二人でしたが、現在では一〇〇〇人当たり一四・七人になっている。移住する人々も多くなっている。三〇キロゾーンの人々がこの町に住んだが、この人々はまたゾーンに帰っていった。(これは事実のようで、バプチン研究所でも同じ事を言っていました。こっそりと帰り、こっそりと住んでいるようです。)

ガンの患者が増えています。甲状腺ガンや急性白血病も発生しています。事故前にはなかったことです。この一年で、急性白血病のために三人が死にました。そのうち一人はゾーンから来た七歳になる子供でした。一度から二度の甲状腺肥大の子供は全体の五二%にも及びます。甲状腺ガンの子供はこの町で八人。ゴメリ州では七七人。ペラルーシ全体では二〇〇人を越えているでしょう。この子供たちを救うことが今一番の問題です。』

『その他、さまざまな病気が増えています。原因は分からないが、リンパ腺肥大が

多くなっている。ハナからの出血が突然子供たちに現われる。おたふく風邪や麻疹などの伝染病が増えている。突然子供たちが高熱や激しい震え（悪寒）に襲われたりもしている。こういう症状は過去にはなかったことです。いろいろ調べてみたら、子供の免疫機能が低下していることが分かった。

また、小児結核が増えています。昨年は二〇人の患者が発見されましたが、今年はこの半年すでに三三人です。幼児性糖尿病や子供の胃潰瘍も次々に現われてきてています。』

『病気の数や種類は増える一方なのに、それを調べる機器も、薬も全く不足している。甲状腺を調べるための基本的な機器であるエコーも、地区病院に一台しかない。保育器も一台しかない。未熟児で生まれた子供をどうすることもできない。とにかく何もかも不足している。注射器、消毒綿、くすり、シャーレ、なにもない。手術の後の糸もない有様だ。』

『この町には、放射能の問題がある。事故前、ここは〇・〇一～〇・〇二ミリレントゲンだったが、現在では二・〇～三・〇ミリレントゲンだ。森はすべて汚染されている。三三二地点のチャルニカという木の実を調べてところ、全てが基準値をオーバーしていた。キノコは全地域の七〇%がオーバーしている。』

事故後一ヵ月間は牛乳からヨウ素一二一が大量に検出された。放射能が体内に入らないように監視はしている。全食品工場に器械を置いているが、残念なことに古くて使いものにならない。そのため、中には汚染した食べ物、牛乳がまぎれこむかもしれない。昨年、ゴメリ州の四〇%の母親の母乳が汚染していることが分かった。しかし、

どうすることもできない。』

【子供たちに支援を！】

まさに絶望的な話が延々と続きます。『外国人の人たちがよくミンスクには来るけれど、汚染地には来ない。ここには援助は何も届かない。日本に帰ったら、ここで人々がどういう風に生活しているかを正確に伝えてください』といったウラジミールさんの言葉が胸に響きます。しかも、モズィリの子供たちが九月には九州にやってくるのです。『なんとかしたいね！』という思いは強く、同盟モズィリ支部や医療関係者との話し合いで、モズィリ市子供病院に血液分析器と医薬品を送ることを約束しました。（パレスカヤ・ゾーラチカの一行が九州に来た際、約束通り手渡しました。）



モズィリ市を拠点に、汚染地区の調査を終え、再びミンスクへと向います。

アンサンブルの子供たちには会うことは出来ましたが、サナトリウムに入所していた子供との再会（？）ができていません。モルダビの方に避暑に出かけていて捕まらないのです。低学年の子供たちがミンスク郊外にキャンプに行っているということでしたが、その後の所在が掴めない、そんな調子です。やつとの思いで、サナトリウム第五期生の指導者と連絡が取れ、ミンスクへの途中で会うことになりました。

【スタイルはすばらしい！】

サナトリウム第五期生は、スペトロゴルスク市から八三人、ゴメリ市から三一人の子供たちでした。私たちが訪ねたのはスペトロゴルスク州立スポーツ学校のフェレモン・シュク先生のお宅です。

『この町から八三人の子供たちがスタイルを訪れた。私も自分のクラスの二〇人の子供たちと一緒にサナトリウムへ行ってきた。以前は、この地区は北コーカスへ行っていたが、今回スタイルへ行ってとても良かった。食事もすばらしく、二人部屋で住心地も良かった。風呂に入っての温浴治療やヨガなどもした。一番良かったのは医療機器があり、検査できることだ。はじめてエコーの検査をしてもらった。すぐに画面にでるのでよく分かった。私を含め、全ての子供が甲状腺肥大の症状があった。その内三人は三度まで進んでいたためすぐに治療を始めなければならなかった。また、サナトリウムの医者だけでなく、ミンスクからも放射線の専門の医者がやってきて診察してくれた。子供たちはみな喜んで、帰りたがらなかつた。』

一緒にサナトリウムに行った娘のジャーナ（一〇年生）が、『そうよ、まだ三月だったのでみんなでスキーをして遊んだわ。今年リトアニアに行って森のなかで十八日間キャンプをしたの。でもずーと雨で晴れたのは三日だけ。閉じ込められたままだったの。でもサナトリウムにはいろんな施設、映画館もあって、退屈しないわ。』

『子供たちは昔から夏の間キャンプに行くという習慣があったから、スタイルの保養と聞いても、「何で北に行くのか」という発想だが、私たちはスタイルについてよく知っていたので、すぐに行った。予想どおりすばらしいところだったので、次も受け入れてくれるよう頼んだが、そうもいか

ない。他の地区からの順番もあり。』という話でした。『日本人たちに何かメッセージでもない？』と、ジャーナに聞いてみた。『そうね。日本でも広島、長崎で被害があったのは知っています。今後二度と子供たちにこんな被害がないように、お互いに努力しましょう。……うーん、日本は車がいいね。』ということで、サナトリウムについての情報も仕入れることが出来ました。これでどうにか報告することが出来るとホット胸を撫で下ろしています。

サナトリウム九州は無事改修工事も終わり、八月一九日に新しいグループを迎えています。ゴメリ州のノロビヤンスク地区から移住した人たちです。現在はブレストに住んでいる五六人がサナトリウム第六期生として迎えられました。小さな子供は母親も一緒に保養にきたそうです。この子供たちも、今まで一度も検査を受けた事がない子供たちでした。

ペラルーシでは五〇万人の子供たちが移住も出来ずに汚染地での生活を余儀なくされています。内分泌の病気の子供の保健機関への登録者数は七万八九〇〇人に上ります。そのうち甲状腺の病気の子供は六四%（約五万人）となっています。しかし、私たちが訪れた地区では、ほとんどのところがエコーもなければ血液分析器もないという状況で、『器械を使った検査は受けた事がない』という話でした。検査をすればもっとたくさんの子供たちが保健機関に登録されるのかも知れません。

サナトリウム九州が大いに役に立っていることが確認できたことは大きな励みになりましたが、 Chernobyl の病魔はますます広がりそうな気配でした。

私達の支援もまだまだ続きます。

おわり。

核も原発もない地球のために
『ストップ原発輸出』キャンペーン

インドネシア、ジャワ島中部のウジュンワットという、ランプで暮らす人々の村に、原発を建てようという計画があります。そのために、関西電力の子会社であるニュージェックという会社が事前調査を行っています。9.5～9.6年には、日本の三菱とアメリカのウェスティングハウス社が組んでAPWRという新型の原子炉の建設をはじめるのではないかといわれています。

これは、インドネシアにとって、はじめての原発であると同時に、日本からのはじめての本格的な原発輸出となってしまいます。また、台湾やタイでも同じように日本からの原発輸出の動きがあります。

原発の予定地は沖合10Kmまで水深20mの遠浅の海が続く、美しい半農半漁の村です。インドネシアはアジア有数の火山国であり、地震に伴う津波が冷却水を奪い、大きな事故になる可能性も心配されています。また、スハルト政権は東チモールでの多数の民衆の殺害にみられるように、強権的な軍事政権をひいており、この原発輸出に伴う核の取り扱い技術や施設が、新たな核武装疑惑を呼び起こす危険性をもたらしています。

★ 日本は前の戦争で、2000万人ものアジアの人々を殺害しました。その兵器の多くが、三菱の製品でした。また、三菱化成系列のアジアアース社は、マレーシアで放射性廃棄物を置き去りにし、住民に多大な健康被害を与えています。森林の保護を訴える人々から、三菱商事は、“世界最大の環境破壊企業”と指摘されています。21世紀の三菱には、そんな汚名を返上する企業に変身してもらいたいものです。

★ この原発輸出は、日本政府の許可と、公的資金の裏付けなしには実行することはできません。日本政府は地球温暖化防止のためのCO₂削減の国際的な割り当て分を、アジアに原発を輸出することによって、「他の電源で出るかもしれないCO₂が削減されたことにする」という詭弁を弄して、輸出の許可と、公的資金の援助をも検討しています。

★ インドネシアでは、厳しい軍事政権のもと、100万人署名がはじめられました。このキャンペーンにもすでに多くの海外からの賛同も集まり始めています。

核も原発もない未来のために、アジアへの原発輸出をとめましょう。

あなたの声を、三菱へ、日本政府へ、インドネシア政府へ、とどけてください。

★ 「ストップ原発輸出」キャンペーンにご意見をお寄せ下さい。会員、賛同団体を募集しています。随時、キャンペーンの状況や、ニュースをお送りします。資料もご請求下さい。是非、ごいっしょに!

団体会員 年間会費 一口 5000円

個人会員 2000円

《このはがきキャンペーンは94.4/1～95.3/31まで行います》

連絡先 小木曾 茂子 ☎0532-56-3131(fax) 浜 朝子 ☎045-903-9447
佐藤 大介 ☎06-765-7415 田中 徹二 ☎03-3877-5299

カンパ振込先

日本民間団体が広範囲に健康調査

1943年3月朝日

四月で八周年を迎えるチャルノブリ原発事故で、事故当時に強制避難させられた人々の追跡健康調査が、日本から救援活動をしている民間グループの手で行われている。これまで被災者を対象にした当局側の調査はあるが、避難民は対象に民間のグループが広範囲に調査したのは初めて。第一次集計として約八千三百人のデータがまとまつたが、「健康」はわずか約五%。頭痛、手足の痛み、めまいなどの訴えが高い割合で出ていることが明らかになった。

頭痛などの訴えは高率

第1次分8200人のデータまとめ

現地で調査票配布 「健康」の回答5%

計5万枚を回収へ

隆一さん。

強制避難させられたのは、原発から半径三十キロから四十キロの範囲に住んでいた人たちで、十三万人から十四万人いたとされている。原発事故では、九一年に国際原子力機関(IAEA)の国際障害委員会が「放射能被ばくに直接原因があると見られる健康障害はない」と報告したが、避難民の追跡は不可能として実施されなかつた。それだけに今回の調査資料は、原発事故による被ばくが健康に及ぶる影響を知る上で欠かせない。

これまで七万六千セリットをベニヤンによる医学データを得る突破口となる、と岡谷さんは期待を寄せている。調査を実施しているのは、エルノブリの被災者一人ひとりに届ける運動をしている。「チャルノブリ子ども基金」(代表:櫻道写真家)が数回

明音から全国に呼びかけ、これまで原発の西三・五キロにあ

り原発関係者との家族が住んでいたブリビアチ市や南ラルニシの避難民組織「マリノカ避難民委員会」やボイ

ー市地区中央病院、ウクライ

ナの避難民組織「チャルノブ

リノブリの被災者一人ひとりに届ける運動をしている。」「チャルノブリ子ども基金」(代表:櫻道写真家)が数回

現地を訪れ、集まった調査票を持ちかえった。入させる。「彼女とともに三百歩離れた町や村を訪れた。その結果、その村のコルボーズで計された八千九十九票のうち、現在の健康状態で「健 康」と答えたのは四百二十三人(五・二%)。異常の訴えは、「頭痛」(六八・三%)、「疲れやすい」(六五・二%)、「手足など骨が痛む」(五五・九%)、「めまい」(四四%)、「血圧せん興奮」(三〇・九%)、「などが病む」(同)、「視覚障害」(二六・八%)など(複数回答)。

特に、原発の西三・五キロにあ り原発関係者との家族が住んでいたブリビアチ市や南ラルニシの避難民組織「マリノカ避難民委員会」やボイ ー市地区中央病院、ウクライナの避難民組織「チャルノブリノブリノブリの被災者のもとに、一 枚から、原発事故で住む場所を追われ、健康を侵されてい る人々の叫び声が聞こえてくる。このデータをもとに、専門家による分析を通じて、チエルノブリ原発事故の悲劇的現象を訴える人々に取りたい」と話している。

被災者の所属健康状態を知るために、ビタミンC对付して健康調査票を配布回収してもらひ、広河さんらが数回

出でる中で、IAEA調査報告の「安全宣言」に疑問を持った。昨年夏、原発の北十七キロにあるバラルニシのホニギ地区ウラーザ村の元診療所長で、散りちらになつた百八十八人の安否を尋ねて歩いているマリア・クシャキナさんという医療助手と出会い、彼女とともに三百歩離れた町や村を訪れた。その結果、その村のコルボーズで計された八千九十九票のうち、現在の健康状態で「健 康」と答えたのは四百二十三人(五・二%)。異常の訴えは、「頭痛」(六八・三%)、「疲れやすい」(六五・二%)、「手足など骨が痛む」(五五・九%)、「めまい」(四四%)、「血圧せん興奮」(三〇・九%)、「などが病む」(同)、「視覚障害」(二六・八%)など(複数回答)。

特に、原発の西三・五キロにあ り原発関係者との家族が住んでいたブリビアチ市や南ラルニシの避難民組織「マリノカ避難民委員会」やボイ ー市地区中央病院、ウクライナの避難民組織「チャルノブリノブリノブリの被災者のもとに、一 枚から、原発事故で住む場所を追われ、健康を侵されてい る人々の叫び声が聞こえてくる。このデータをもとに、専門家による分析を通じて、チエルノブリ原発事故の悲劇的現象を訴える人々に取りたい」と話している。

被災者の所属健康状態を知るために、ビタミンC对付して健康調査票を配布回収してもらひ、広河さんらが数回

原発の北西五十キロにあるバラルニシのナロブリヤ市の保健医師異常を訴え、抵抗力が弱くなつたために、疲れやすぐなつていいといふ
1940年7月、広河さんらが数回

